

梶田叡一著「教師力再興－優れた教師に満ち満ちた学校に」教育改革選書No. 2、明治図書出版、2010年6月刊を読む(1)

開示悟入の教育のために(1)

子どもたちに自ら学ぶ意欲を

1. 子どもたちに自ら学ぼうとする意欲を持たせたいものです。たくましい自己教育の力を備えた人間に育ってほしいものです。これは親や教師をはじめ多くの人々の持つ願いであり、重要かつ不易の教育課題であると言ってよいでしょう。
2. 一人ひとりの子どもの姿自体が、時代とともに変わってきています。今の子どもは外で泥んこになって遊ぶとか、友だちと群れて暗くなるまで遊びほうけるといった経験をもっていません。だから無我夢中で何かに没頭するということが、なかなかできないのではないのでしょうか。それに、ひもじい思いを我慢するとか、借りた道具で遠慮しながら遊ぶ、といった経験もほとんどありません。まるで王子様王女様であるかのように、周りからお膳立てしてもらったこと、それも自分に興味のあることしかやろうとはしないようです。今の子どもたちは、溢れるほどの知識を持ちながら直接体験に乏しく、素直ではあるが極めて自己中心的で、自分の好きなことなら一生懸命にやるが他のことは全くやろうとはせず、調子良くいつているときには非常に元気がいいが障害にぶつかるとうすぐに挫折してしまう、といった指摘を多くの人がしています。このような子どもの姿を見れば、親も教師も、もっと本当のやる気を出してほしい、もっとたくましい芯のしっかりした人間になってほしい、という願いを持つのは当然のことでしょう。
3. その上にまた、科学技術の急速な進展もあって、学校教育の内容が過密になり高度になっています。よほど意欲が持続しなくては、よほど厳しく自らに鞭打っていかなくては、到底ついていけないほどのカリキュラムになっています。しかも、昔と違ってほとんど誰もが高校卒業までの12年間、そして半数は大学卒業までの16年間、学校に通い続けなくてはなりません。昔の話によく出て来るような牧歌的教育は、夢のまた夢です。子どもと一緒に遊びながら自然のうちに何かを学びとらせていく、というような教育は、もはや不可能と言っていいでしょう。子どもたちは、一人前の社会人になるため、昔の子どもにはとても想像できないような苦業を長期にわたって課せられているのです。
4. このような状況の中で、私たちはいったいどうしたらよいのでしょうか。学校そのものを否定してしまう、というのは、残念ながら現実的ではありません。現行のカリキュラムを返上して、子どもたちのやりたいことだけを、子どもたちのやれることだけを学習させる、という考えは、結局のところ気休めの空想論でしかありません。とって、子どもたちの弱さやふがいなさ、またそれをもたらしている家庭教育のだらしなさ、といったことを歎いてみるだけでもどうにもな

りません。つまるところ、すべての条件を基本的には与件として受け入れ、その枠の中で教育の具体的あり方を工夫し改善していく、というのが最も現実的で着実な取り組み方ではないでしょうか。少なくともそうした形で子どもたちの現実を大きく変えていく余地が、まだ残っているのではないのでしょうか。

P130 ~ 132

[コメント]

教育経営、教育過程、教育評価の第一人者で、私の尊敬してやまない梶田叡一先生の開示悟入教育についてのお考えがよく示されている。少しずつゆっくりと何回も読み直して、開示悟入教育を「理解」し「定着」させ、日々の生活や活動で「応用」したい。名著の一つと確信する。

— 2012年10月26日 林 明夫記 —